

大学・地域共創プラットフォーム香川 令和6年度第3回進学・教育部会「地域における高等教育の中長期グランドデザイン検討会」議事概要

1 取組について

「地域における高等教育の中長期グランドデザイン検討会」を、令和5年度から進学・教育部会の事業計画に組み込み、大学等の地域における教育改革や教育改善につなげる中長期グランドデザインを検討することとした。令和6年度はSD研修として外部講師を招聘しての研修会を開催した上で、協議を行った。また、「地域における高等教育の中長期グランドデザイン」については、今後も継続して協議を行うこととしている。

2 研修会及び協議概要について

日時:令和6年11月11日(月)13:30~16:00

(1)研修会

講師:小林浩氏(リクルート進学総研 所長)

演題:「2040年グランドデザインのその後」~最新の政策動向とさらなる人口減少への対応~

参加者:22名

(2)協議概要

議題:高等教育のグランドデザインに係る取組について

出席者:常金委員代理(香川県)、片山委員(香川県立保健医療大学)、荒木委員(香川大学)、勘原委員(香川短期大学)、

田保委員(せとうち観光専門職短期大学)、山田委員(四国学院大学)、山本委員代理(高松大学・高松短期大学)、中筋委員(徳島文理大学)

助言者:小林浩氏(リクルート進学総研 所長)

【委員からの主な意見】

○徳島文理大学

18歳人口が減少していることや関西等の私立大学が定員を超えて合格者を出していることなどに危機感を持ちながら入学者の確保に努めている。2023年度から全ての新生を対象に「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」に準拠した教育プログラム(リテラシーレベル)を実施している。具体的には、共通科目「文理科学」において年7回、電子情報工学科や総合政策学科等の教員が講義をしている。テーマは、「文理・融合とは」、「デジタル社会と制度」、「データデザイン力を身に付けよう」、「学習するコンピュータとその応用」、「デジタル社会の基礎知識」、「AI技術とデータ解析の基礎知

識」、「データAI活用で必要な統計学の基礎」である。本年、大学と短期大学部はリテラシーレベルに、理工学部と人間生活学部は応用基礎レベルに認定いただいた。また、初等中等教育段階の変化に対応できるよう教職員を対象とした全学FD研修「新しい学習指導要領から考える主体的対話的で深い学びの実現」をオンデマンド型の個別研修で実施した。本学は令和7年4月に香川キャンパス（さぬき市）から高松駅キャンパスに全面移転し、総合政策学部経営学科を新設する。経営学科では「経営学を通して地域の課題に解決策を見だし、その持続的な発展に貢献できる地域のプロフェッショナルを育てる」教育を行う。また、他の学部においてもリカレント教育の充実などに取り組んでいる。

○四国学院大学

本学では県内出身者が約6割であり、学生募集は厳しい状況が続いている。現在の高校3年生から行った施策としては、従来の支給型の奨学金を見直し、新しい奨学金を2つ整備した。また、一般入試や大学入学共通テスト利用入試において従来の2教科型から3教科型を新設したり、資料請求者やオープンキャンパス参加者等にさらにアプローチするためMAツールを導入したりしている。学びの部分に関しては、2010年からのメジャー制度を導入し、学部を越えてメジャーを選択でき、2つのメジャーを選択できるダブルメジャーも可能となっている。今の高校3年生から新たにアスリート科学を新設し、25のメジャー（主専攻）と4つのマイナー（副専攻）の学びを主体的に作っていくことができる。メジャー制度には科学教育があり、また演劇も学べるので、グランドデザインにあるSTEAM教育の学びができるカリキュラムにもなっている。2028年度から更に18歳人口が減少することも想定して、今後は留学生や社会人に向けた取り組みも行うなど、この5年間で勝負であると考えている。

○香川大学

学士課程全般及び大学院の改革に引き続き、博士課程充実のための取組をスタートさせたところである。多くの学生に選んでもらえるよう、奨学金などを含めて支援体制を整えることに苦心している。今年度から次世代研究者挑戦的研究プログラム（SPRING）制度に採択され、学生や大学院生の生活も含めて研究サポートできることになった。香川大学は、数理・データサイエンス・AI教育強化拠点コンソーシアム四国ブロックの代表校になっており、横の展開と縦の展開に力を入れているところである。新たに徳島文理大学においてリテラシーレベル及び学部での応用基礎レベルの認定、高松短期大学においてリテラシーレベルの認定となったことを嬉しく思っている。今後、本プラットフォームにおいて数理・データサイエンス・AI教育事業を共同の事業として位置づけることについて検討しているところである。

○香川県立保健医療大学

本学は看護学科と臨床検査学科をもつ医療系の専門大学として、教育の質保証という面では新しいカリキュラムの完成年度を迎えた。その特徴的なこととして、看護学科においては地域の中に学生が出向いて地域住民や地域のステークホルダーとともに事業の運営や企画を行うなど「地域サポーター実習」として2単位の必修化をして展開しているところである。また、リテラシーレベルの認定を受けており、医療情報等の科目を設置するなど情報分野の教育を進めているところである。この2、3年において入試倍率が非常に低下したことについて大きな危機感を持っており、現在入試について情報分析

するとともに、喫緊の課題として入試改革に取り組んでいる。定員の半数を占める県内高校を対象とした学校推薦型選抜入試の倍率も低下しているの
で、本学の特色を理解してもらうために高校訪問等を再開したり、今年度からSNSを活用した広報を開始したりしたところである。内部質保証も重要課題
であり、IR推進室等の設置を含めて学内で検討するなど、組織としての取組体制を整えているところである。また、リカレント教育の充実については、県
内医療機関と連携するための会議等を設けており、地域連携推進センターを中核として取り組んでいるところである。

○高松大学・高松短期大学

本学は、短期大学を昭和 44 年に、大学を平成 8 年に開設した。短期大学では保育学科と秘書科を開設していたが、秘書科については今年度入学生か
らこれまでの教育にビジネス志向をプラスして新たにビジネスデザイン学科として出発したところである。大学は経営学部経営学科と発達科学部子ども発
達学科を持っている。発達科学部には、先生にならない学生が 3 割程度いることから、次年度入学生から、経営学部の科目を融合し、ビジネスも学べる
ようにすることで、「先生にはならないけど子どもが好き」「子どもと関わる仕事に就きたい」、という学生の意図を汲めるような「子どもビジネスコース」を設
置する。また、数理・データサイエンス・AI教育については、リテラシーレベルにおいて令和 5 年度に大学が、今年度は短期大学が認定された。経営学部
では、応用基礎レベルが取れるよう準備を進めている。カリキュラムについては、地域の方々にお世話になりながら地域のなかで学んでいっているところ
である。更に高大連携については、新たな模索をしているところである。

○香川短期大学

本学には 4 つの学科があり、これまで生活文化学科の中に生活介護福祉専攻と食物栄養専攻があったが、生活介護福祉専攻において入学生数が減
少していたため令和 4 年度以降の募集を停止した。その後、生活文化学科は学科名から学びの内容が分かるよう来年 4 月から栄養食物学科に変更す
る。同様に、経営情報科には情報ビジネスコースとデザインアートコースがあるが、美術・デザイン系が学べるのが分かりやすいように経営情報・デザイ
ン学科に名称変更する。高校生から見て学科の名称で学びの内容が分かることは大切である。また、本学では地域との連携という観点から、地域を巻き
込んだ取組を行っている。例えば、県内で唯一栄養士資格を取得できる食物栄養学科では、食物栄養専攻の持つスキルを地域の子どもや住民の方の
ために新しいレシピを考えたり、漁連や行政と連携してノリの養殖の害となっているチヌを美味しく食べられるレシピを考えたりするなど、専門性を生かせ
る分野での地域連携に取り組んでいる。また、子ども学科では将来の保育者養成に少しでも繋がることを期待して、地域の子どもたちを招いて「こども劇
場」を開催し、学びの成果を劇や音楽によって発信している。また、積極的に高校訪問を行っており、入試センターに加えて食物栄養専攻や子ども学科、
デザインアートコースの教員が高校の家庭科や美術の教員を訪ねて、卒業生の様子や本学での学びを伝えていくなかで本学の認知度向上を図ってい
る。さらに、新たにX、Instagram、TikTok などのSNSを立ち上げたり、リクルートのもつビッグデータを活用してDMを送付したりした。高校1年生や2年生
の秋の段階においてある程度のアプローチを行ってないと、3年の4月、5月でPRしても受験してくれない。早い段階での学生募集活動に変えていこうと
思っている。

○せとうち観光専門職短期大学

本学は開学して4年目である。3年間で1つの区切りがついた今年度は、どういった人材育成をするのか、人材育成のためにどういうことを目指して教育をするのかということを確認にした上で、学長を中心にカリキュラム改革を検討している。特に重要なことは、本学が観光を学ぶ専門職短期大学であるということから、観光のエキスパートを育てるという共通認識を持っていることである。そのうえで、観光のエキスパートとは、地域との関わりを持つことであり、観光を通してどのようにして地域に貢献していけるかをしっかり教えていかなければならない。本学では臨地実務実習が何よりも重要な科目であり、いかにその地域との関わりの中で観光を学び、観光を学ぶことを通してその地域を見据えていくかという流れが望ましいと考えている。実習を行う学生の問題発見能力と問題解決能力を養うための方法をどのようにして臨地実務実習に取り入れるかなどについて、カリキュラム改革の議論を行っているところである。

○講師助言

地域のプラットフォームなどが上手くいっていないのは、学生募集において各大学等は競争相手であるので機能してないのが実情だと思う。香川県が人口はあまり減らないのに流出している県だとすると、2つの対策方法がある。1つは県内の子どもをどうやって流出させないか、もう1つは大阪、兵庫、岡山からどうやって香川県の大学等に進学させるのかということである。例えば工業大学は8つ程度の工業大学が集まって「工大サミット」を実施している。総合大学ではなく工業大学で学ぶ良さを全国持ち回りで伝えており、高校の教員やマスコミなどを招いてロボコンのロボットを見せたりするなどしている。土地・地域の魅力のようなものをどう発信していくか、個々の大学で行くと競合関係になるが、この香川をどうやって打ち出して香川に人を持ってくるかについては色々戦略があるのではないか。例えば、今治では岡田武史氏がサッカーチームを作ったり、徳島では企業の経営者が集まって「神山まるごと高専」を作ったりした。香川県にはさまざまな魅力があるような気がするが、誰がどのように支援してくるのが見えない。今企業は人手不足であり喉から手が出るほど大卒者を欲しいので、そういった企業が奨学金を作るところも非常に増えている。香川県も企業も人が不足するはずなので、このプラットフォームで奨学金を作るとか、企業の連携奨学金を作るとかの方法があるのではないか。もう1つは、隠岐島前高校のような島留学に取り組む地域が増えており、全国の高校が地域連携プラットフォームのようなものを作り、その中で生徒が地域間移動をしている。また、地域のネタを学生が持ってきて発表すると知らないことが沢山ある。「せとうち」をもっと前に出していくとか、高齢者は移住してくるが若者は何故来ないのかなどについて、学生に加えて企業や金融機関も入れてディスカッションをしてもいいのではないか。1、2年で解決できる問題ではないが、5年の間に何か手を打って香川のブランド価値みたいなものを作っていくというのは国立大学を含めた課題ではないだろうか。香川では人材育成の面も含めるなど、レイヤーを上げてディスカッションできるといいのではないか。個の大学が頑張るだけでは「ゼロサムゲーム」である。流出を止めるための魅力化というのが凄く重要である。

○香川県

大学が魅力発信する際の魅力とは何かを教えてください。ひと昔前であれば大学卒業後の就職先であったが、例えば今は慶応大学が起業家を

輩出していることで目立ち他の学部と遜色ない人気を得ているし、近畿大学がマグロの完全養殖で有名になり、全国的に人気が高まった。例えば今は就職先が魅力を表す指標になっていないのかを教えてください。

○講師

就職先は大学の魅力になっているが、ストーリーになっていない。人手不足が続いている中、どの大学も就職率は良いので就職率をPRするだけでは意味がないのではないかと。近畿大学の発祥は臨海研究所(現・水産研究所)であり、建学の精神が「実学教育」と「人格の陶冶」である。その実学の最たるものがマグロの養殖であり、マグロを使った料理を店で提供するなどのストーリーができています。例えば、せとうち観光専門職短期大学であれば、現場で働く人は専門学校卒だが、マネジメント職は専門職短大卒であるということになれば、アメリカのコネル大学のようなブランドができるのではないかと。今、熊本や北海道にTSMCが進出している。水が綺麗だから半導体企業が来ることを生かして、産業を作れば人口集積に繋がる。徳島県には全国トップクラスの情報インフラがあるのでIT企業が集まり、新しい形の学校である神山高専が設立された。一番根本になる香川県の魅力があると、ワンソースマルチユースのようなストーリーができてくる。晴れの国岡山では果物が豊かというストーリーがある。広島大学でのゲノム編集研究の展開によって、東広島市にゲノムの編集者が集まっており、新しいクラスターができて人口が増えている。地域のコアの価値が何かという議論ができると良い。その結果が就職率ではなく、就職先や学生の活動の成果として現れたりするとストーリーになってくるので、高校生が大学を選ぶ際のイメージができるのではないかと。